

教科学習と食育を連携させた総合的な学習のカリキュラム開発と実践

笹原克彦 富山市立寒江小学校

概要：教科との連携に配慮しながら、「食育」をテーマとした総合的な学習のカリキュラムを構成した。教材を選択する際の観点や、教科との関連づけを行う際の観点到留意したカリキュラムを構成し実践することによって、教科と総合的な学習の時間が連携し、相互に関連した子供の能力が高まった。

キーワード：総合的な学習の時間 カリキュラム開発 食育 教科との連携

1 はじめに

学習指導要領(文部科学省,2003)では、総合的な学習の時間は、各学校において「ねらいを踏まえ、総合的な学習の時間の目標及び内容を定め」ることを求められている。その内容として、「例えば国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題、児童の興味・関心に基づく課題、地域や学校の特色に応じた課題」について、各学校に応じて特色あるカリキュラムを構成することとなっている。

環境や健康に関わる「食育」について、農林水産省(2004)は、「国民一人一人が自らの『食』について考える習慣を身につけ、生涯を通じて健全で安心な食生活を実現することができる」よう、「必要な全国的な情報提供活動や地域における実践活動等を行う『食育』を推進していくことが重要」と述べている。21世紀に生きる児童にとって、自分たちの食を見直す学習を進めることは、とても重要である。

一方、総合的な学習の時間の指導方法として、学習指導要領では「各教科、道徳及び特別活動で身に付けた知識や技能等を相互に関連付け、学習や生活において生かし、それらが総合的に働くようにすること」と示されている。

総合的な学習のカリキュラムを構成する際に、どのような観点から教材を選択し、それらをどのように教科と関連させるかについて明らかにすることができれば、各学校においても、

各校独自の総合的な学習のカリキュラムを構成することが容易になる。そこで、これら食育に関わる内容による、教科との連携を図ったカリキュラム開発を構想し実践した。

以下に、単元開発の考え方と、期待できる子供の能力の伸長について、具体的な事例をもとに報告する。

2.1 カリキュラムを構成する際の留意点

単元開発を行う際に以下の2点に留意する。

学習テーマとなる、教材を選択する際の観点を明示する。
選択した教材と関連する教科の内容を整理し、学習活動や内容の重なりを、全体計画の中に組み込む。

2.1 教材選択にあたっての観点的明示

「食育」を内容とするために、以下の4つの観点到当てはまる教材の選択を行う。

地域性があるか

地域に広く栽培されている産物や伝統的な産品のように、触れるための機会や人材が豊富にある教材を選択する。

親和性があるか

身の回りにたくさんあって、日常、よく目にすることが望ましい。また、課題を解決していく中で「児童自ら生産する」「頻繁に見学に出かける」など、体験活動が容易に行えることも条件とする。

意外性があるか。

教材がいくら身近にあっても、それが、そのまま児童の課題とはならない。教材の中から児童が課題を見付けるためには、児童の先入観をくつがえし、疑問を感じさせることができるような要素を持っていることが必要である。

今日性があるか

食と健康、食料自給率、遺伝子操作農産物など今日的な問題へとつながり、環境、国際理解等の内容へと発展的に考えられる教材を選択する。

2.2 選択した教材と教科との関連

選択した教材をもとにカリキュラムを構成する際に、教科学習とどのような内容や方法で関連させることが可能かを考える。以下の観点から、関連する教科を年間計画の中に位置づけ、教科学習と関連させながら総合的な学習の時間の実践を進める。

教科の教材として活用する。

総合的な学習の時間で扱う教材そのものが、教科学習の教材としても活用できるかどうかを考える。

教科の学習内容と関連している。

総合的な学習の時間で扱う内容と教科学習の内容と重なりを考える。

育てたい能力に重なりがある。

教科学習で身に付いた能力を、総合的な学習の時間で活用することや、総合的な学習の時間で必要な能力を教科学習の中で高めることを考える。

3 実践の概要

3.1 実践の対象児童と期間

富山市立寒江小学校児童22名。
平成17年5月から平成18年3月。

3.2 単元名

「大豆が支えるわれわれの暮らし」

3.3 教材選択にあたっての観点

親和性があるか

われわれが日頃口にしている食材には、

醤油、豆腐、納豆など、大豆を原料とするものが多くある。大豆食品を口



(図1) 教科との連携を考えた総合的な年間指導計画

(表1) 総合的な学習の時間と連携した教科学習一覧

連携の観点	教科	単元名	主な学習活動
教科の教材として活用できる。	理科	植物の発芽と成長	・大豆を使って発芽実験を実施する。
	家庭	朝におすすめのサラダを作ろう	・大豆を材料の一品としたサラダ作りを行う。
教科の学習内容と関連している。	社会	これからの食料生産 工業生産と貿易	・食料自給率と輸出入の問題を考える。 ・日本と世界との貿易上のつながりを考える。
	国語	人と「もの」とのつきあい方	・江戸時代の自給自足社会を知る。
育てたい能力に重なりがある。	国語	調べたことを整理して書こう (言葉の研究レポート)	・テーマや内容に即して書籍、インターネット等の資料の選択を行う。 ・一番伝えたいことをが何かを明らかにする。
	国語	伝え合って考えよう (人と「もの」とのつきあい方)	・絵図やグラフなどの資料を提示して発表する。 ・原稿を読まずに自分の言葉で発表する。

にしない日はないくらい、大豆はわたしたちの生活と強く結びついている。

地域性があるか

国産大豆の多くは、減反による転作作物として栽培されており、寒江校区においても、大豆栽培が進められている。

農業を専業とする地域ボランティアの協力が得られるので、助言を受け自ら栽培し、大豆を生産する上での工夫や苦労を体験的に学ぶことができる。書籍やインターネットの資料で得た知識を、体験と結びつけて学習を進めることが可能になる。

意外性があるか

醤油や豆腐など大豆食品の多くは、本来の形をとどめていない。また同じ材料から作られているが、色、香りなどさまざまな点で違いがある。大豆が食品として多様な姿に変わっていることは、児童にとっては意外な事実に感じられる。

また、豆腐、醤油など大豆を原料としている事が知られている物の他にも、サラダ油、豆菓子など大豆製品であることを意識しない物や、湯葉、雑穀酒などのように存在そのものが、あまり児童に知られていない物など、多種多様にある。これら大豆食品と出会うことによって、自分たちの暮らしが、大豆と強く結びついていることを、体験的にとらえることができる。

今日性があるか

大豆は、栄養バランスに優れており、今日の日本人の食生活を改善する上で、メリットの大きい食材である。

また、日本人の食生活に重要な役割を占めている割には、国内自給率の大変低い作物であり、

(表2) 児童の考えた学習課題(1学期)

種類	・どのような大豆食品があるか
製法	・大豆食品はどのように作られているか
栄養	・大豆にはどのような栄養があるのか
健康	・大豆食品はどう健康によいのか
歴史	・大豆食品がたくさん食べられているのはなぜか ・大豆はいつから日本でこんなに食べられるようになったのか

残留農薬、遺伝子組み換えなど、食の安全保障という観点から今日的な問題をはらんだ食材でもある。

以上のことから、大豆は、多様な体験活動、追究活動を行うことが可能な教材となり得る。

3.4 選択した教材と教科との関連

教科の教材として活用、教科の学習内容との関連、育てたい能力の重なりという3つの観点から、「大豆そのものを教材とした学習」「大豆をテーマとした総合的な学習と内容が関連した学習」「教科学習で身に付く力の中で特に総合的な学習で生かしたい能力を期待できる学習」の3つの分類で教科学習の単元を選び出し、学習活動を明示して整理した(表1)。

これらの教科学習との関連を埋め込みながら、1年間を3つの学習場面に分けた総合的な学習のカリキュラムを構想した(図1)。

3.4 実践の実際と考察

「大豆はわれわれの暮らしを本当にささえているか」

児童は、日頃、たくさん大豆食品を口にしているが、それらを大豆食品として意識することはあまりなかった。そこで、大豆食品の中から、豆乳、醤油を数滴ずつとさいころ大の豆腐を試食することから学習を始めた。同じ材料でありながら、色も香りも形も全く違う食材を口にした体験から、児童はさまざまな視点で課題を見付けていった(表2)。

調べ学習の過程では、スーパーマーケットや豆腐工場の見学を行った。見学を通して、大豆を材料とする食品が多種多様にあることや、大豆食品が生産される工程、働く人々の工夫や苦

労を理解した。さらに、大豆生産の工夫や苦労を探るために、栽培体験も進める



(図2) 自給率分のみそ汁と豆腐

(表3)一番言いたいことを考えて発表しているか

選 択 肢	人数
A とてもよく考えるようになった	6
B 少し考えるようになった	13
C あまり考えていない	1
D もともと考えていた	2

(回答22名)

(表4)原稿を読まず自分の言葉で発表できるか

選 択 肢	人数
A 以前より、よくできるようになった	10
B 以前より少しはできるようになった	9
C あまりできない	3
D もともとできる	0

(回答22名)

(表5)総合とのつながりを感じた教科

教科	人数	教科 領域	人数
国語	6	家庭	9
社会	13	道徳	0
算数	1	4年までの総合	1
理科	12	その他	2

(回答22名：複数回答)



(図3)原稿を見ずにゲストティーチャーに質問する児童

ことに
した。

また
教科学
習にお

いても、理
科で大豆
を使って発芽
実験を行っ
たり、家庭
科で大豆を
材料とした
サラダ作り

を行ったりした。

2学期の初めに、社会科の食料生産の学習のまとめとして、わが国の食糧自給率について考える学習を行った。さらに、総合的な学習の時間に、自給率分だけの食事(図2)をする体験を行った。社会科や1学期の総合的な学習の内容をふまえて、新たな学習課題を見付け、追究活動を進めた。

単元の途中には、調べたことを共有し合うために、中間発表を行った。「話の中心を明らかにすること」「図表を使って発表すること」など、国語科で身につけた能力を活用しながら、児童は発表を行った。

中間発表を終えた時点で、自分の能力や総合と教科の関連に関する児童の意識を調査した。4月当初に比べて19名の児童は中心を意識して話すようになったと考えており(表3)、自分

の言葉で話すことについても、19名が以前よりもできるようになったと考えていた(表4)。このことから、能力が身に付いたことについての自覚ができた。

また全ての児童は、教科と総合に何らかの関連があることに気付いていた(表5)。社会科には、自給率という学習テーマの中心となる内容のつながりがあり、理科、家庭科には、発芽実験や調理など体験活動を伴う学習を行ったことから、児童は関連を意識できた。

教科学習と総合的な学習を関連させながら学習を進めることによって、教科で身に付いた力が、総合的な学習の時間で発揮された。また、総合的な学習の時間で伸びた力を、教科学習の中にフィードバックさせていた。しかし、国語科との能力的な関連に対する児童の自覚は、十分とは言えなかった。

4 終わりに

「食育」をテーマとした総合的な学習のカリキュラムを構成する際、以下の点に留意して教材を選択した。

1 教材選択にあたっての観点を明示する。

地域性があるか。	親和性があるか。
意外性があるか。	今日性があるか。

さらに、教科と関連する要素を洗い出した上で、カリキュラムを構成した。

2 選択した教材と教科との関連を考える。

教科の教材として活用できる。
教科の学習内容と関連している。
育てたい能力に重なりがある。

これらの観点から教材を選択し、カリキュラムを構成することによって、教科と総合的な学習の時間が相互に関連し、子供の能力が高まった。

[参考文献]

- [1]文部科学省：「小学校学習指導要領」(1998,2003 一部改正)
- [2]農林水産省：「我が国の食生活の現状と食育の推進について」(2004)